

日本学術会議会長談話

坂口志文先生のノーベル生理学・医学賞受賞、 北川進先生のノーベル化学賞受賞を祝して

この度、坂口志文先生（大阪大学特任教授）・日本学術会議連携会員が、システム生物学研究所のメアリー・E・ブランコウ氏とソノマバイオセラピューティクス社のフレッド・ラムズデル氏とともに、ノーベル生理学・医学賞を受賞され、また、北川進先生（京都大学理事・副学長、特別教授）が、メルボルン大学教授のリチャード・ロブソン氏とカリフォルニア大学バークレー校教授のオマー・M・ヤギー氏とともに、ノーベル化学賞を受賞されました。御受賞を心よりお慶び申し上げます。坂口先生は現職の日本学術会議連携会員として、北川先生は、第25期まで長年にわたり日本学術会議の会員・連携会員としてご活躍くださっており、この度の受賞を日本学術会議会長として大変誇りに思います。

この度の坂口先生の受賞は、過剰な免疫反応を抑える「制御性T細胞」を発見し、新たな研究分野の基盤を築いた業績が高く評価されたものです。

坂口先生の研究は、自己免疫疾患の治療・予防や、がん免疫療法、より安全な臓器移植など、様々な医療への応用が期待されています。

基礎研究を長年にわたり一つ一つ積み重ねてこられた結果として、こうした画期的な功績につながり、がんや自己免疫疾患の新たな治療法の開発に貢献されたことは、医学分野にとどまらず、学術界全体にとっても大変意義のあるものです。

また、北川先生の受賞は、「有機金属構造体」の開発に関する業績が高く評価されたものです。

北川先生の研究は、今までにない新しい多孔性材料の開発と、そこに大量の気体の取り込みが可能なことを立証されたものであり、大気中の汚染物質の除去や、危険なガスの安全な貯蔵・輸送などに応用できることから、エネルギー、環境、医療分野など、現代社会の諸問題に対する新たな解決策につながるものとして高く評価されています。

お二人は、既成概念にとらわれず、他に類を見ない研究や実現不能と思われている研究に新しくチャレンジすることの重要性とともに、そうした独創的な研究が様々な社会課題を解決する大きな可能性を秘めていることを改めて社会にお示しになりました。

坂口先生、北川先生におかれては、引き続き第一線の研究と後進の育成に御活躍いただくとともに、学术界全体及び社会に対する発信にもお力を発揮していただきたいと存じます。

今回の受賞は、我が国の科学研究の高い水準を改めて世界に示しました。日本学術会議においては、我が国の科学者を代表する機関として、引き続き、多様な研究の意義が広く理解され、社会に浸透するよう取り組むとともに、学術のさらなる発展のために力を尽くしてまいります。

2025 年 10 月 10 日

日本学術会議会長 光石 衛